

活気と潤いがあり、みんなが「育つ」学校を目指して

自分の一歩 みんなの一歩

校長室だより II

朝霞市立朝霞第一小学校

令和3年9月1日

No.43(合同No.16)

校長 野口 邦彦

防ぐカギは「コミュニケーション」 感染拡大防止も、防災も

9月1日は「防災の日」です。今、私達のまわりには、新型コロナウイルスなどの感染症拡大防止、暑さによる熱中症対策、大地震や豪雨等の防災対策など、身近に様々な危機を感じます。そ

れぞれの危機に備えておく必要があり、危機管理は喫緊の課題です。特に、感染症などは「見えないものへの備え」であり、大地震などは「突発的なものへの備え」です。だからこそ、常に「いつ起きてもいいように」危機管理をしておくことが大切です。だからといって、いつもビクビク緊張感を保ったままでは、精神的に参ってしまいます。何事においても、現代のキーワードは「持続可能」、こういった事態だからこそ、危機管理においても持続可能にしておくことが大切なのではないでしょうか。そのヒントは過去の様々な災害の教訓の中にあると思います。

毎年のように全国各地で起こっている震災や水害、その被害を最小限にとどめた地域の共通点を見てみると、一つには「地域のコミュニケーション」があげられます。物資の備えや避難経路・避難場所の確認などはもちろん大切ですが、「いざという時」にそれをスムーズに活用できる土台は、普段から地域でコミュニケーションを図っているかという事です。「いざという時に」一番役に立つのが、地域に住んでいる人々が、顔を知っているという事だそうです。

今週から2学期が始まりました。開始早々、新型コロナウイルスの変異株の猛威により、学校は、半日授業や分散登校、オンライン授業と、今までにない対応を余儀なくされています。そんな中、先生方の子供達への想いとチーム力のお陰で何とか準備が進められています。あらためて一小の先生方のチームワークの良さに、校長として感謝するばかりです。今後どんな対応を迫られるか、まったく想像が付きませんが、こんな時に大地震や水害が起きたらと思うと…、だからといってマイナスばかり考えていても仕方ありません。先程述べたように、こんな非常事態だからこそ、大切なのは「コミュニケーション」です。非常時だけではなく、「チーム一小」として、普段からの「コミュニケーション」を大切にしていける事が、きっと「いざという時」にも力になってくれると思います。

こんな事が、いつ起きても



活気と潤いがあり、みんなが「育つ」学校を目指して

自分の一歩 みんなの一歩

校長室だより II

朝霞市立朝霞第一小学校

令和3年9月10日

No.47(合同No.17)

校長 野口 邦彦

高校野球に教えられた

自分ではどうにもならない事への態度

夏休みの後半、西日本を中心に記録的な豪雨が続ききました。多くの地域で被害が発生しました。朝霞市も荒川が決壊すると、全市的に浸水被害が発生すると言われており、決して他人ごとではありません。

豪雨のような自然災害、そして現在も猛威を奮っている新型コロナウイルスなど、近年、私達のまわりには「自分ではどうにもならない事」が多くなってきたような気がします。(本をただせば、その原因は人間にあるのかもしれませんが)

そんな中、1年ぶりに開催された夏の風物詩である高校

野球。その1回戦「大阪桐蔭対東海大菅生」の試合、「自分ではどうすることもできない事」に対して、どう対処すればいいのか、それを教えられました。試合は東西の強豪校による本

大会屈指の好カードということもあり、内容的にも素晴らしい試合でした。しかし、後半から強い雨、本来ですと中止すべきグラウンドコンディションですが、審判は何とか最後までやらせてあげたいと、試合を続行しました。途中、悪コンディションの中、敵味方関係なく、汚れたバットを互いに拭いてあげるという心温まるシーンもありました。

(左写真)しかし、さすがに「これでは出来ない」という豪雨に見舞われ、試合は降雨コールドとなりました。勝った方も、負けた方も笑顔はなく、最後までやりたかったと

いう「くやしき」もあったと思います。しかし、そんな感情は一切出さず、互いの健闘を称え合うと同時に、コロナ禍の中で大会を開催してくれたこと、悪コンディションの中、1回ごとにグラウンド整備をしてくれた人への感謝を述べていました。この高校生たちの姿を見て、これまで野球を通して学んできたこと、大切にしてきたことは何なのかが感じられ、「勝ち負け以上に大切な事」そして「自分ではどうすることもできない事への態度」を教えられたように思います。

新型コロナという「自分ではどうにもならない事」は、まだまだ続きそうです。しかし、そんな中でも、この高校生たちのように、人としてのあるべき姿は、互いに見失わないようにしていきたいものです。

異例のゲームセット



悪条件の中でも



活気と潤いがあり、みんなが「育つ」学校を目指して

自分の一歩 みんなの一歩

校長室だより II

朝霞市立朝霞第一小学校

令和3年9月13日

No.48 (合同No.18)

校長 野口 邦彦

東京2020オリパラに思う③

これこそがスポーツの原点 失敗しても笑顔で「ありがとう」

色々あったオリンピック、パラリンピックですが、始まってしまうと、連日、日本人の活躍に一喜一憂している自分がいました。しかし、ある種目のある選手を見た時、そんな勝敗に一喜一憂している自分が恥ずかしくなりました。

その選手は、スケートボード フィリピン代表のマーヅリン・ディダル選手です。

今大会から新競技となったスケートボード、男子の堀米雄斗選手や女子の西矢椛選手が金メダルを取り、一気に脚光を浴びました。この「ストリート」という種目は、階段や手すりなどの障害物をいかにかっこよくスケートボードで滑り降りるかという競技です。その



種目に参加したディダル選手、何度も何度も技を失敗、でも落ち込むわけでもなく、何度も何度も立ち上がり、みんなに笑顔で答える。最後の技も失敗、でも笑顔でみんなに「(日本語で)ありがとう」と言っていました。その姿に、清々しさを覚えました。スポーツが競技である以上、そこには勝敗が付きます。でも、勝敗に関わらず、自分の力をひたむきに精一杯発揮しようとする姿に、「スポーツは本来こうあるべき」という原点を見たような気がします。

試合後のディダル選手の言葉「スケートボードは人生と同じ。何度転んでも、また立ち上がり挑戦すればいい。オリンピックと言う大きな舞台上で、自分の限界に挑戦できることがうれしい」と。

努力が結果に結びつき歓喜する選手。思ったように自分の力が発揮できず、結果が出せず涙する選手。この歓喜も涙もスポーツです。でも、ディダル選手のように、「この舞台にいらることがうれしい」とオリンピックという場を思いっきり楽しんでいる姿もスポーツです。

「転んだら、また立ち上がればいい」ディダル選手の姿に、あらためてスポーツのすばらしさ、そして元気と勇気をもらいました。

競い合うけども仲間

スケートボードという種目、まさにこれからの五輪に似合った種目だと思いました。競技の中でライバルと競い合っているけれど、今まで培った自分の技を見せ合う、成功した選手とは共に喜び、失敗した選手にはみんなが集まり、健闘をたたえ合う、そこには他の競技のような何としてもメダルを取らなければという悲壮感はありません。本来の「スポーツの在り方」とはこうあるべきと、あらためて教えてくれる競技でした。

スケートボード ストリート
ディダル選手



失敗した選手に
かけよる仲間

